

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

慶應義塾大学

法学部

科目

世界史

総括

試験時間	60分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	100点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総論〉

大問が4、小問が50。すべて語句を語群から選択させる問題という形式。IとIIIは例年通り、地域・時代を超えたテーマ史。リード文はよく練られており、「マラリアの歴史」など興味深いテーマを扱っている。出題分野としては、戦後史・近代アジア史(半分か東南アジア)・文化史がそれぞれ20%を占める。出題形式は、空欄補充・一問一答形式の語句を問う問題がすべて。昨年見られた正誤問題、同時代を問う問題が消えた。受験生に対し、思考力ではなく記憶力を要求しているかのようである。記載されている教科書が2冊以下という難問奇問が、全体の3分の1を占める。語句選択という形式にこだわる限り、平均点を調整するためには、このような難問奇問に走らざるを得ない。出題形式の工夫を望みたい。

〈特記事項・トピックス〉

大問Iは、定番の香料・香辛料の歴史。大問IIIは、マニアックな感染症(マラリア・天然痘・コレラ)の歴史がテーマ。大問IIは、ラテンアメリカ通史。大問IVは、東欧戦後史、インドシナ戦後史。冷戦終結後の2000年代まで。

〈合格への学習対策〉

語句の知識を問うだけだが、変化球で攻めてくるのがこの学部の特徴。「リリウオカラニ女王」を問うのに、①「ブラジルと並ぶ日系移民の移住先」で、②「19世紀半ばに立憲君主制が成立」した国の、③「最後の国王」は誰か、と聞いてくる。①・②のヒントからハワイを想起できないと、リリウオカラニは出てこない。語句の「周辺」にまで気を配る必要がある。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ(表題)	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
I	語句選択	香料・香辛料の歴史	「海の道」や、大航海時代につながる世界史のメインテーマ。「『五経正義』編纂に参加」から「顔師古」、「張仲景が原著者」から『傷寒論』は、細かい知識だが、語群から選択できるだろう。「インド西北岸」の海港から「スーラト」、「サファヴィー朝を滅ぼした」から「アフシャール朝」を導くのは難。	標準
II	語句選択	ラテンアメリカ史	ラテンアメリカ史は定番の地域史。ヴェルデ岬諸島、サン=ドマングの蜂起、ジム=クロウは難だが、出題例あり。アシエント権は教科書の頻度は低いが、頻出。	やや難
III	語句選択	感染症の歴史 (マラリア・天然痘・コレラ)	病気の歴史などの「社会史」は、近年の流行テーマ。「19世紀に英が撤退した地域」から、「ジャワ島」を導くのが難か。ガレノス、チャドウィックが難だが、出題例あり。	標準
IV	語句選択	東欧戦後史、インドシナ戦後史	冷戦終結後のユーゴ内戦やカンボジア内戦まで問う。ハベル大統領、ラオスのランサン王国、カンボジアのフン=セン政権、「SEATO加盟国でベトナムに派兵」からオーストラリアを導くのは難。	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階(難・やや難・標準・やや易・易)で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。